Osaka University Knowledge Archive

Title	新出土資料関係文献提要（十）
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2009, 48, p. 162-171
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61042
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国研究集刊　麗号（総四十八号）平成二十一年六月　一六二―一七一頁

新出土資料関係文献提要（十）

草野友子

本提要は、『中国研究集刊』金号（総四十六号）に掲載された「新出土資料関係文献提要（九）」の続編である。前回同様、郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）・上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）に関する文献を主対象とした。以下、「原釈文」「工具書」「研究書（中文書）」「研究書（和書）」の四つに分類する。

原釈文

『上海博物館蔵戦国楚竹書（七）』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇八年十二月、三二五頁、縦組繁体字）

上博楚簡の図版（写真版）と釈文考釈とを収載した書の第七分冊（第一分冊・第二分冊は提要（一）、第三分冊は提要（四）、第四分冊は提要（六）、第五分冊は提要（八）、第六分冊は提要（九）で解説済み）。本巻には、『武王践阼』『鄭子家喪』『君人者何必安哉』『凡物流形』『呉命』の五篇が収録されている。「図版」（写真版）と「釈文考釈」との二部よりなる。

『武王践阼』の原釈文担当者は、陳佩芬氏である。全十五簡。篇題はなく、『大戴礼記』武王践阼篇と多く重複することから、「武王践阼」と名付けられた。本篇は、師尚父（太公望）が武王に丹書の言を告げ、武王が様々な器物に自戒の銘を刻むという内容である。

『鄭子家喪』の原釈文担当者は、陳佩芬氏である。甲本・乙本があり、いずれも全七簡。篇題はなく、冒頭句に基づく仮称である。本篇は、鄭の子家の死をめぐって、

楚の荘王が鄭を包囲するに至り、さらに鄭を救援した晋と両棠で戦い、大勝するという内容である。

『君人者何必安哉』の原釈文担当者は、濮茅左氏である。甲本・乙本があり、いずれも全九簡。篇題はなく、本文に見える君王に対する諫めの言葉を篇題としている。本篇は、君王（楚の昭王）に対して、范乗（范無宇）が諫言するという内容である。

『凡物流形』の原釈文担当者は、曹錦炎氏である。甲本・乙本があり、甲本は全三十簡、乙本は全二十二簡。篇題は、甲本第三簡背面に「凡物流形」とある。本篇は九章で構成され、多く「問之曰」より始まるが、問いのみで答えはない。その体裁と性質は、『楚辞』天問篇と極めて似ている。

『呉命』の原釈文担当者は、曹錦炎氏である。全九簡。篇題は、第三簡背面に「呉命」とある。本篇はおおよそ二章に分けられる。第一章は、呉王が軍を率いて北上し、陳国の国境内に至って晋国に恐慌を引き起こしたため、晋君は臣下を派遣して呉国と交渉し、ついに呉軍を陳国から離れさせた、という内容である。第二章は、呉王派の臣下が労を周天子に告げるという内容であり、『国語』呉語の記載とおおむね一致する。

なお、『武王践阼』には現行本『大戴礼記』武王践阼篇との対照表が、『鄭子家喪』『君人者何必安哉』『凡物流形』には甲本・乙本の対照表が、それぞれの「釈文考釈」の末尾に付されている。

工具書

『簡牘帛書通仮字字典』（白於藍編著、福建人民出版社、二〇〇八年一月、四二五頁、横組繁体字）

通仮字に関する字典。楚帛書、信陽楚墓、郭店楚簡、九店楚簡、及び上博楚簡（第一分冊から第五分冊まで）中の通仮字を集めている。

三十の韻部に分類して排列し、各声系毎に文字を提示している。「○与×」という形式で「○」「×」双方が通仮関係にあることを示した後、その文字が見える文献名と該当箇所の一文とを掲げる。郭店楚簡・上博楚簡（第一分冊から第五分冊まで）の原釈文の竹簡排列案に異説が提示されている場合は、著者が最も妥当と見なした竹簡排列案が採用されている。

巻頭には「篇名対照表」、巻末には「主要参考文献」「條目索引」「筆画検字表」を付す。

新出土資料研究において、文字を確定する際の判断基準の一つが通仮字である。本書は、新出土資料における文字の通仮関係を容易に確認することができる字典であり、今後の新出土資料研究において必携の工具書となろう。

『古文字類編（増訂本）』上・下（高明・涂白奎編著、北京大学震旦古代文明研究中心学術叢書特刊、上海古籍出版社、二〇〇八年八月、一六四八頁、横組繁体字）

古文字に関する字書。一九八〇年に刊行された『古文字類編』（高明編、中華書局）を大幅に増訂したものであり、近年出土した文献の文字が新たに追加されている。その中には、郭店楚簡や上博楚簡（第一分冊・第二分冊）の文字も含まれる。

本書は、第一編「古文字」（単体文字）、第二編「合文」（合体文字）、第三編「未識徽号文字」（甲骨文や金文に見られる絵のような文字）の三編で構成されている。第一編「古文字」では、各字について、「甲骨」「金文」「其他文字」「説文」の四項目に分け、それぞれ該当する文字を掲載する（増訂前は「甲骨文」「銅器銘文」「簡書及其它刻辞」「秦篆」となっていたが、本書では表記が変更されている）。第二編「合文」では、「甲骨」「金文」「其他文字」の三項目に、第三編「未識徽号文字」では、「甲骨文」「青銅器銘文」の二項目に分けられている。

巻末には、「引書目録」「引器目録」「検字表」を付す。

『古文字類編』は、様々な古文字を収録した古文字研究の基本書である。今回その増訂版が刊行されたことは、今後の古文字研究・新出土資料研究にとって非常に有益である。

『楚系簡帛文字編（増訂本）』（滕壬生著、湖北教育出版社、二〇〇八年十月、一三五九頁、縦組繁体字）

楚系文字に関する字書。湖北省・湖南省・河南省より出土した竹簡・竹牘・楚帛書上の墨書文字、計一九二五〇字を集めた『楚系簡帛文字編』（滕壬生著、湖北教育出版社、一九九五年七月）を再編・増訂したものである。新たに九店楚簡、郭店楚簡、新蔡葛陵楚墓竹簡、上博楚簡第一分冊・第二分冊、及び香港中文大学文物館蔵簡牘

の戦国楚文字を増加し、計四九〇五四字を収録している。

本書は、単字、合文、附録の三部構成である。竹簡の欠損により不鮮明なものは収録せず、音義不明のものや隷定できないものは附録に収められている。

文字の配列は、『楚文字編』（李守奎編著、華東師範大学出版社、二〇〇三年十二月。提要（五）で解説済み）同様、『説文解字』の順序とし、『説文解字』に見えない文字については字形によって配列している。字頭（異体字を含む）は四六二一個。記載形式としては、枠外に楷書体を掲げ、枠内に小篆、隷定された文字、楚系文字の順に掲げる。各楚系文字の下には、その出処（文献の略称と竹簡番号）と辞例（該当箇所の一文）とを記載する。

巻頭には「引用資料全称・簡称及出処表」、巻末には「筆画検字表」を付す。

本書は、楚系文字を多数収録した大型の字書であり、戦国楚簡を中心とした新出土資料を釈読する際に、大いに役立つ一書である。

研究書（中文書）

『郭店簡与上博簡対比研究』（馮勝君著、中国語言文字研究叢刊（第二輯）、綫装書局、二〇〇七年四月、五一八頁、横組繁体字）

郭店楚簡・上博楚簡に関する研究書。「形制篇」「文本篇」「国別篇」の三部構成であり、主に文字学の観点から検討を加えている。

「形制篇」では、まず、郭店楚簡・上博楚簡（第一分冊から第五分冊まで）の各文献の竹簡形制を概説する。続いて、戦国時代の竹簡の製造方法、竹簡に抄写する方法、一つの竹簡に収められている文字数、編聯、篇題、収巻について解説している。

「文本篇」では、郭店楚簡『緇衣』と上博楚簡『緇衣』の、文字と文義とを対比している。また、郭店楚簡『性自命出』と上博楚簡『性情論』との本文の復原、章序の対比、本文の対比を行っている。

「国別篇」では、楚地出土の戦国簡や楚人が抄写した竹簡を全て「楚簡」と称してよいかという問題を提起する。そして、郭店楚簡『唐虞之道』『忠信之道』『語叢』一～三及び上博楚簡『緇衣』について、偏旁・文字形体・「用字不同」（同じ文字を表すのに異なる字体が用いられているもの）の対比を行う。その結果、これらの文献は、斉系文字の特徴を有した抄本であるという結論が提示さ

れている。

附録「談談郭店簡《五行》篇中的非楚文字因素」では、郭店楚簡『五行』中に楚系文字とは言えない文字が含まれていることを指摘し、『五行』は楚人による抄本ではあるが、楚文字の抄本ではないとの結論に達している。

巻末には、「郭店《唐虞之道》・《忠信之道》・《語叢》一～三以及上博《緇衣》与楚簡偏旁対比表」「《説文》古文・三体石経古文与戦国文字対比表」「所有様本統計表」「典型様本統計表」「《説文》古文総表」を付す。

本書は、郭店楚簡と上博楚簡とを文字学の観点から総合的に比較・検討している点に特徴があり、新出土資料研究における一つの研究手法を提示している。

『《上博楚竹書》文字及相関問題研究』（出土文献訳注研析叢書Ｐ０２７、蘇建洲著、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇八年一月、二八六頁、横組繁体字）

上博楚簡に関する研究書。「《上博楚竹書》字詞柬釈」「《上博楚竹書》文字資料運用及相関文字考釈」「以古文字的角度討論《上博楚竹書》文本来源」の三部構成であり、主に文字学の観点から検討を加えている。上博楚簡の第一分冊から第六分冊の文献を研究範囲とし、楚系文字だけでなく他の古文字資料も用いて検討している。

「《上博楚竹書》字詞柬釈」では、上博楚簡所収文献の中で、原釈文や諸研究者の解釈に疑問がある文字や語句を抽出し、それぞれ詳細に検討を加えている。

「《上博楚竹書》文字資料運用及相関文字考釈」では、「楚銅貝」「西周金文」「戦国金文」「楚簡文字」「伝鈔古文」の中のいくつかの文字について、上博楚簡研究の最新の成果を用いて再検討することにより、これまで解読できなかった文字を解明したり、従来とは異なる解釈を提示したりしている。

「以古文字的角度討論《上博楚竹書》文本来源」では、上博楚簡はどこの国の文献を底本として抄写されたものかという点について、文字学の角度から分析する。そして、上博楚簡『周易』『曹沫之陣』『鮑叔牙与隰朋之諫』『昔者君老』『孔子見季桓子』の中に、斉や魯といった他国の文字の特徴を有した字体が含まれていることを理由に、これらの文献は楚以外の国の文献を底本として抄写されたものであると指摘している。

本書は、著者による近年の楚文字研究の成果を集約したものであり、今後の文字学研究において参考となる一書である。

『出土文献与先秦儒道哲学』（出土文献訳注研析叢書Ｐ０２８、郭梨華著、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇八年八月、三五三頁、横組繁体字）

郭店楚簡・上博楚簡に関する研究書。新出土資料と伝世文献とを比較することによって、先秦の儒道哲学を再検討している。第一編「総論」、第二編「出土文献与先秦道家哲学論題」、第三編「出土文献与先秦儒家哲学論題」、第四編「出土文献与先秦儒道哲学論題」の四編で構成されている。

第一編「総論」では、まず「出土文献与先秦哲学探究」において研究方法を提示する。続く「中国哲学問題的起源与本原之探究」では、先秦の儒家・道家が共に重要な論題とする「文」と、孔子・老子以後に重視された「情」という二つの概念について考察する。

第二編「出土文献与先秦道家哲学論題」では、先秦の道家に関する文献、特に『老子』『恒先』を取り上げ、『老子』中の「損―益」観、『老子』と黄老思想との関連、『老子』の後学の発展状況、道家と古代天文学の関係、『恒先』及び戦国時代の道家における哲学的論題について検討している。

第三編「出土文献与先秦儒家哲学論題」では、儒家の佚書である郭店楚簡『五行』と、郭店楚簡『性自命出』及び上博楚簡『性情論』とを取り上げる。まず、『五行』中の「五行」について考察し、続いて『五行』における「徳之行」の哲学的意義を明らかにする。さらに、『五行』（馬王堆帛書『五行』も含む）における「徳」と「色」とについて分析する。また、『性情論』（『性自命出』）中の「情」に着目し、『中庸』や『礼記』楽記篇などの伝世文献との比較を通して、孔子の後学が説く「情」の性質を明らかにしている。

第四編「出土文献与先秦儒道哲学論題」では、まず、伝世文献や上博楚簡『民之父母』中に見える「民之父母」という語について検討し、先秦の儒家及び『管子』の為政観を明らかにする。次に、郭店楚簡『性自命出』『五行』、『中庸』『孟子』及び『管子』四篇に見える「心」「性」について検討し、これらの文献の先後関係を推測している。

本書は、新出土資料と伝世文献とに共通して見られる重要語句を取り上げて、詳細に比較・検討を行っている点に特色がある。

『郭店楚簡儒家哲学研究』（出土文献訳注研析叢書P029、謝君直著、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇八年八月、三三〇頁、横組繁体字）

郭店楚簡に関する研究書。全六章、附録二篇で構成されている。主に取り上げられている文献は、『緇衣』『五行』『窮達以時』『六徳』である。

まず、第一章「導論」において、これまでの郭店楚簡の儒家系文献研究の成果を概説し、子思あるいは思孟学派という観点からの検討には限界があることを指摘する。

第二章「〈緇衣〉異文詮釈及其儒学意涵」では、これまで『子思子』の一篇である可能性や子思学派との関連ばかりが注目されてきた「緇衣」を再検討し、郭店楚簡『緇衣』と『礼記』緇衣篇との異文の比較を通して、「緇衣」における「礼」観念を追究する。

第三章「簡帛〈五行〉的人道思想」では、『五行』における人道思想に着目し、馬王堆帛書『五行』と郭店楚簡『五行』とを比較して、そこに含まれる人道思想の異同について言及している。

第四章「〈窮達以時〉所蘊含的義命問題」では、『窮達以時』における「義命」について、先行研究にて提示されている「義命合一」と「義命分立」という異なる解釈のどちらが適切であるかを検討している。

第五章「〈六徳〉的徳性観念及其実践原則」では、『六徳』における六徳と六位・六職との関係、「仁内義外」の観念及び服喪の原則について考察する。

第六章「結論」では、以上の検討を総括した上で、現代における儒家哲学の意義について論じている。

巻末には附録として、二〇〇八年が『郭店楚墓竹簡』刊行の十年目に当たることから、その間に行われた思想研究を文献毎に概括し、問題点を浮き彫りにした「《郭店楚墓竹簡》出版十週年（1998—2008）之思想研究現況述評」、既発表の著書や研究論考を一覧にした「郭店楚墓竹簡研究資料目録」を付す。

本書は、郭店楚簡の儒家系文献を対象として、従来あまり注目されていなかった観点からの検討を主に行っている。また、本書の附録部分は、これまでの郭店楚簡研究の状況を知ることができる資料として、充実した内容を備えている。

『上博楚簡与先秦思想』（出土文献訳注研析叢書Ｐ０３０、浅野裕一著、佐藤将之監訳、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇八年九月、二四四頁、横組繁体字）

上博楚簡に関する研究書。全八章で構成され、主に上博楚簡の第四分冊・第五分冊・第六分冊所収文献（『相邦之道』『曹沫之陳』『君子為礼』『鬼神之明』『競建内之』『鮑叔牙与隰朋之諫』『姑成家父』『競公瘧』『天子建州』）に関する論考を収録する。

まず、「自序」において、日本における新出土資料研究の現状が報告されている。第一章から第八章では、文献毎の個別研究が行われている。各章の題目は以下の通り。第一章「〈相邦之道〉的整体結構」、第二章「〈曹沫之陳〉的兵学思想」、第三章「〈君子為礼〉与孔子素王説」、第四章「〈鬼神之明〉与《墨子・明鬼》」、第五章「〈鮑叔牙与隰朋之諫〉的災異思想」、第六章「〈姑成家父〉中的「百豫」」、第七章「〈競公瘧〉的為政与祭祀咒術」、第八章「〈天子建州〉的北斗与日月」。

本書掲載論文の日本語版は、『上博楚簡研究』（湯浅邦弘編、汲古書院、二〇〇七年五月。提要（九）で解説済み）、『竹簡が語る古代中国思想（二）―上博楚簡研究―』（浅野裕一編、汲古書院・汲古選書、二〇〇八年九月。本提要にて後述）に収録されている。

なお、著者による戦国楚簡研究の中国語版として、本書以外には『戦国楚簡研究』（浅野裕一著、佐藤将之監訳、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇四年十二月。提要（五）で解説済み）があり、郭店楚簡と上博楚簡（第一分冊・第二分冊・第三分冊）に関する論考を掲載している。

研究書（和書）

『上海博楚簡の研究（二）』（大東文化大学上海博楚簡研究班編、大東文化大学大学院事務室、二〇〇八年三月、二三六頁、縦組和文）

上博楚簡『周易』に関する訳注書。大学院ゼミの成果をまとめたものである。底本には、『上海博物館蔵戦国楚竹書（三）』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇四年三月）所収の『周易』を用いている。

まず、「関係論著目録」として、上博楚簡『周易』について論じた著書・雑誌論文・インターネット論文などを順次列記する（掲載されている論著は、二〇〇七年十二

月までのもの)。

次に、上博楚簡『周易』訳注「その2」として、第十六簡から第二十九簡まで(随卦・蠱卦・復卦・无妄卦・大畜卦・頤卦・咸卦・恒卦)の訳注を掲載する。訳注は、各卦毎に、「本文」「訓読」「口語訳」「注」で構成されている。

本書は、「注」が非常に詳細であり、通行本・馬王堆本・阜陽漢簡本等との比較もなされているため、『周易』を研究する上で有益な資料となる。今後、継続して刊行されることを期待したい。

なお、本書の前巻に当たる『上海博楚簡の研究(一)』(大東文化大学上海博楚簡研究班編、大東文化大学大学院事務室、二〇〇七年三月)には、上博楚簡『周易』訳注「その1」として、第一簡から第十五簡まで(蒙卦・需卦・訟卦・師卦・比卦・大有卦・謙卦・豫卦)の訳注が掲載されている(提要(九)で解説済み)。

『竹簡が語る古代中国思想(二)—上博楚簡研究—』(浅野裕一編、汲古書院・汲古選書、二〇〇八年九月、三三九頁、縦組和文)

上博楚簡に関する研究書。「戦国楚簡研究会」の共同研究の成果である。全十章、附篇二篇で構成され、主に上博楚簡の第五分冊・第六分冊に関する論考を収録する。

第一章「上博楚簡『姑成家父』における百豫」(浅野裕一)は、晋の三郤が登場する『姑成家父』を取り上げ、本文献における「百豫」の意味を考察した後、その文献的性格を明らかにしている。第二章「上博楚簡『競公瘧』における為政と祭祀呪術」(浅野裕一)は、『競公瘧』に説かれる君主の為政と祭祀呪術との関係を考察するとともに、古代思想史上に占める位置についても検討している。第三章「上博楚簡『天子建州』における北斗と日月」(浅野裕一)では、『天子建州』には礼と天体とを結合する思考が見られることを指摘する。

第四章から第六章では、上博楚簡中の楚王に関する文献を取り上げている。第四章「上博楚簡『荘王既成』の「予言」」(湯浅邦弘)、第五章「太子の知—上博楚簡『平王與王子木』—」(湯浅邦弘)、第六章「上博楚簡『平王問鄭寿』における諫言と予言」(湯浅邦弘)では、それぞれ文献の釈読を行った上で、その文献の特質や著作意図等を明らかにしている。そして、これらの文献は、楚の王や太子に対する教戒の書であったと推測している。第七章「戦国楚簡と儒家思想—「君子」の意味—」(湯浅邦

弘）は、上博楚簡『孔子見季桓子』『君子為礼』『弟子問』『従政』を手がかりに、儒家思想における「君子」について再考している。

第八章「上博楚簡『弟子問』考釈―失われた孔子言行録―」（福田哲之）は、拼合・編聯による残簡の復原と、『論語』との比較による内容・構成の分析とによって、『弟子問』全体の釈読・考証を行う。続く第九章「上博楚簡『弟子問』の文献的性格―上博楚簡に見える孔子に対する称呼―」（福田哲之）では、『弟子問』と他の上博楚簡の儒家系文献とにおける孔子に対する称呼を比較することにより、『弟子問』の文献的性格を明らかにしている。

第十章「上博楚簡『慎子曰恭倹』の文献的性格」（竹田健二）は、『慎子曰恭倹』の文献的性格や上博楚簡の成立時期との関連から、「慎子」が慎到とは考えがたいことを指摘している。

附篇には、残簡同士を綴合して竹簡の復原を試みるという内容の論考、及び上海博物館が刊行を予定している戦国楚簡「字書」に関する重要な報告を掲載する（「上博楚簡『孔子見季桓子』1号簡の釈読と綴合」（福田哲之）、「上博楚簡「字書」に関する情報」（福田哲之））。

本書は、日本国内において上博楚簡の第六分冊の研究成果をいち早くまとめた研究書であり、今後の新出土資料研究の活性化に寄与する一書となろう。

なお、「戦国楚簡研究会」の成果として、上博楚簡の第一分冊・第二分冊所収文献を主に取り上げたものに、『竹簡が語る古代中国思想―上博楚簡研究―』（浅野裕一編、汲古書院、二〇〇五年四月。提要（七）で解説済み）、第三分冊・第四分冊・第五分冊所収文献を主に取り上げたものに、『上博楚簡研究』（湯浅邦弘編、汲古書院、二〇〇七年五月。提要（九）で解説済み）がある。

[付記]

本稿は、平成二十年度日本学術振興会・科学研究費（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。